

デジタル世代のための テクノロジーアートとしての 映画／映像史サバイバル講座 ～ラスコーの洞窟からゴダールまで～

目次

Part.1 映画史100余年、創造的破壊のためのレッスン

はじめに わたしのプロフィール プロシューマーの時代が訪れる クリエイティブは二十一世紀の産業 映画は自由になりたがっている 次世代の映画は誰が作るか 技術と技法の映画史を知る意味 テクニックとスキルの問題 アルチザンとアーティスト 新しい教科書、サバイバルハンドブック 「秘密の知識」が教えるもの ニューヴェルヴァーグと印象派 80年代映画ビデオ革命が語りかけるもの フィルムからデジタルへ、無限の可能性

Part2 第1部 そして映画はゼロ年に至る

技術と技法の見えない映画史 リバースエンジニアリングの手法を使う 映像から映画への連続性 聖と俗のまなざし 魔法の幻灯機、マジックランタン スペクタクル（見世物）と万国博覧会 写真から映画へ トーマス・エジソンとステイブ・ジョブズ リュミエール兄弟のスマホ＝シネマトグラフ テクノロジー・イノベーションの臨界点 テクノロジー主体のアートの宿命

Part2 第2部 われらが内なるハリウッド

サイレント映画の美学 ビジネスとしての映画の完成 イメージコントロールの帝国

Part3 ヒッチコック/ウェルズ

煉獄の中の自由あるいは生き残るためのレッスン 見えない映画のサイクル ハリウッドは夢のブラック企業か 二人の天才、変化し続けるスタイル 運命のライバル サスペンス映画の巨匠 自由からの逃走 子どもが喜ぶ大きな機関車 ハリウッド映画の本質を暴き出した『市民ケーン』 ハリウッドの実験映画作家 国際自主映画作家 規格外のB級映画、『黒い罌』と『サイコ』 テクノロジーとテクニクで制約を越える 映画史上の最高のオープニングシーン 早すぎた未来の傑作映画 シャワーシーンの作者は誰か 新しい時代の預言者としての映画作家 天才の晩年

Part4 七〇年代アメリカン・ニューウェーブとアーティストスタイル

ソフトウェアでハードの限界を超える 見えない映画のサイクル 絢爛豪華、テクニカラーの時代 ヨーロッパからの波 テレビ電波という波 クロサワショック 世代交代、アルチザンからアーティストへ 汚しと反逆者 ニューカラー派の勃興 光と色彩で描く 完璧主義のニューヨーカー 孤高

の技術者キューブリック 自然光のパレット 堕ちたアーティスト ルーカ
スの逆襲 世界で共鳴し始めるアーティストたち

Part5 ニホン映画TVビデオ史考

見えない映画のサイクル 伝説から真実へ 日本が世界に誇る撮影監督、宮川
一夫 巨匠たちとの共同作業 黒沢明 溝口健二 小津安二郎 市川崑 黒沢明
ふたたび テレビの考古学 ライブからパッケージへ テレビと日本映画
テレビマンユニオンと状況論 ENG革命 8ミリ映画ブーム 消え行く境
界線 『お葬式』以前と以後 ハイビジョンとマルチメディア Vシネからデ
ジタルビデオへ 融合するテクノロジー

Part6 ジャン＝リュック・ゴダール 映画ビデオ技術の宇宙誌

映画史と映画誌 見えない映画のサイクル ゴダール伝説による時代区分
ゴダールを再定義する 五〇年代、暗闇での映画作り 六〇年代、映画技術と
技法の実験 七〇年代 テレビとビデオの実験 辺境とスタジオ経営 ア
メリカ大陸への亡命 音と画の考察 あるカメラの物語と複数の映画史 九
〇年代、インターネットとデジタルの実験 映画は自由になりたがっている